

「あぴっぴい～★★ほがぁぁ～★★！！」

(勝負にならねえ～★尻穴いじられて★マジで、抵抗できねええ～★★！！)

ルキに SEX 勝負を挑んだ俺は、レイラの目の前で、無様に責められまくっていた。

「ほらほらぁ♪どうしたのお～笑」ルキは笑いながら、俺を見た。

「ちっくしょお～✕このお✕！」俺が動こうとすると、

「クチュクチュクチュ♥」ルキの尻穴ほじりが炸裂する。

「アヘアヘアへ～～★尻穴ほじり気持ちいい～★★」

恥ずかしさのあまり顔を真っ赤かにして身体をモジモジさせてしまう俺。

「ほらぁダメじゃん♥こっちがお留守だよ♥」

ルキはカウパーをダダ漏れさせている俺の勃起ペニスをガッチリと掴んでシゴいた。

「シ～コ♥シ～コ♥シ～コ♥・・・」

ゆっくりのチンシコではあったが、尻穴とチンポの同時責めは俺には強烈すぎた。

「ちょ、ちょっと、まっ・・・ってえ★」

「ボワっ♥」俺の亀頭は一気に膨らんだ。

「あれえ？もう前立腺に予約入っちゃったあ？イッちやうのかなあ？」

「ひいい～★★チンポ、止めてってえ★アナル、やめてってえ★」

「はあ！？止めてじゃねーよ♥イクんだよ♥さっさとチン汁飛ばせよ♥」

「シコシコシコシコ♥クチュクチュクチュクチュ♥」容赦のない2点責め。

「もうダメ★予約う・・・は・・・入った★ガマン、できなっ★」

「ぷぴゅ♥ぴゅ♥ぴゅ♥ぴゅくぴゅく♥」俺の粗チンから勢いよく飛ぶイカ汁。

試合開始、わずか3分。敗北を喫する俺。

「き、き、きんもちいい～★★」舌を出してピクつく俺。

「はあ？まだ終わりじゃねーよ♥」

ルキはさらに深く尻穴に指を食い込ませ、勢いよく俺のアナルをほじった。

「くっちゅ♥くっちゅ♥くっちゅ♥・・・」

「ま、待って！いま、イッたばかりなのにい★」

俺は尻穴ほじりで全身をビクビクと痙攣させながら、口をパクパクさせた。

「ぱく！ぱく！ぱく！ぱく！・・・」

まるで陸に打ち上げられた魚のように口をパクパクと無様にパクつかせ、白目を剥いた極上のアへ顔をさらしてしまう俺。

「おら♥さっさと♥射精♥しろ♥アへ顔♥さらして♥もっかい♥チン汁♥飛ばせ♥」

ルキは、まるで指マンのような形で俺のアナルに指を挿入し、いじくり回した。

「クチュクチュクチュクチュクチュクチュクチュ♥」

エロオイルと尻汁のいやらしい音がこだます。

「あ・・・ぷ・・・ぱっ・・・ぱ★・・・ぷ★・・・わぁ★」

声にならない息を漏らし、身体をモジモジとバタつかせる俺。

粗チンからは、カウパー汁が大量に漏れ、糸を引きまくっている。

「くそ✖！くそお✖！」

顔を真っ赤にして抵抗しようとするが、

「はぁ～～？うるせ～な♥」

ルキはそう言うと、尻穴ほじりと同時に玉揉み握りを繰り返した。

「フニフニフニフニフニ♥」

柔らかく握り揉まれる俺のキンタマ。

「ぐわわっ★」

俺は身体を仰け反らせてヨガってしまう。

「アクメ面さらして、ぶっ飛べよ♥」

ルキは再度チンシコに切り替えた。

「シコシコシコシコシコシコ♥」

「クチュクチュクチュクチュクチュ♥」

尻穴ほじりとチンシコの二重奏でめくるめき、俺は大きく叫んでしまう。

「ちくしょ～✖★ちんちくしょ～✖★★」

「何がチクショ～だよ？アへ顔さらしてヨガりながら叫んでも説得力ね～よ笑」

ルキは笑いながら、さらに二重奏を早めた。

「ひいい★ま・・・またイク★」

俺が叫んだ瞬間、ルキは俺の尻穴から指を抜くと、チンシコも止めた。

「おわ！おわわ★！おんわぁ★！」

俺は急なストップでイクのを我慢してバタバタしてしまう。

次の瞬間、ルキは俺のふくらはぎに蹴りを入れ、俺を四つん這いに倒した。

「ぐお！」

急なキックの痛みに悶える俺。

「ふう♥そろそろいいかなぁ♥」

そう言うと、ルキは四つん這いになった俺の後ろから、俺のアナルと自分の巨根にエロオイルを大量にぶっかけた。

「どふどふどふ♥どぺどぺ♥どぺっぺ♥」

大量のオイルで瞬く間にヌルヌルになっていく俺の尻とルキの巨根。

しかし、ルキはそれだけでは終わらない。続いて今度は、俺のアナルにエロオイルと水まんじゅうを浣腸した。

「ぬっぷうう♥」

エロオイルと水まんじゅうがゆっくりとお腹の中に入ってくる。

「くっ★くはぁ～～★」俺は四つん這いのまま、無抵抗で受け入れるしかなかった。

(ひいいひいいひいいひいい★やややや、ヤバひいい★イツ・・・アレをやる気だ★レイラの目の前で・・・男の娘にさせられちゃうう★)